2023年8月24日取材

福島県

産地レポート

キュウリ

福島県内1位の販売額を誇るJAふくしま未来 露地栽培でのつるもち性のよさが「Vシュート」導入の決め手

（編集部）

↑「Vシュート」を手に来年以降の意気込みを語ってくれた生産者の氏家慎之介さん。

地域概況

ＪＡふくしま未来は福島県北地域と相馬地域の12市町村を管轄する広域ＪＡで、管内面積は福島県全体の19%を占めています。伊達地区は献上桃の郷「桑折町」があるようにモモの栽培が盛んで、また、福島県ブランド認証産品のあんぽ柿を生産する産地としても知られています。また、キュウリやニラは管内トップの生産量を誇ります。

伊達地区キュウリ生産部会の概要

伊達地区キュウリ生産部会は保原、梁川、霊山、西部の4地域からなり栽培面積は全体で84haを誇ります。ハウス長期雨よけ栽培が中心でそのほか抑制、露地栽培が行われています。出荷は西部地区を除く3地区で共同選果機が導入され、生産者の約7割が利用しています。自己搬入されたキュウリを光センサーで規格分けし、品質のそろったキュウリが京浜市場を中心に仙台、北陸方面、県内市場へも出荷されています。その出荷量は最盛期で1日60～70ｔに上ります。

販売額日本一の理由

先述の通り当地では長期雨よけ栽培が多く、共同選果で品質も安定しているため市場での評価が高く、事実出荷場に並んだキュウリはよく太り肌つやにもすぐれていました。ここまでには部会員と営農指導員の方々が品質が安定する長期雨よけ栽培と共同選果を並行して発展させてきた経緯があります。

福島県は自治体がキュウリへの新規就農を後押ししており、伊達地区では後継者や新規就農者が多いとのことでした。伊達地区全体のキュウリ営農指導を統括する佐藤さんによると、「長期雨よけ栽培が盛んな地域ではあるものの、新規の方は資材費がかかることや継続できるかもわからない」と、露地栽培を推奨しているそうです。佐藤さんは若手営農担当者の指導も兼任され、産地の段階的な発展を見据えた取り組みに力を入れておられると感じました。

福島県とＪＡ福島中央会は、ＧＡＰ日本一を目指し認証取得にも取り組んでおられます。ＪＡふくしま未来のキュウリもＪＧＡＰの団体認証を取得しており、認証をうけたものは優位価格で取り引きされています。

「Vシュート」導入の経緯

今回取材した保原地区は栽培面積18haのうち、露地が2haあります。露地作の定植は遅霜のリスクを避け5月下旬～6月上中旬ごろに行い、収穫は7月下旬～8月ごろに最盛期を迎え、長くて10月いっぱいまで続きます。

「Vシュート」は2021年に部会役員を含む3名で試作し、昨年は地域を変え山手から平地まで地理的に異なる生産者3名で試作。その結果、後半までつるもちがよく収穫の波が少ないことが評価されました。今年は部会員同士の意見交換もあり、保原地区の部会員8名が導入されました。

ご承知の通り、キュウリは朝、夕の2回収穫し夏は収穫作業で忙しくなります。従来の品種は収穫の盛期が集中することと、値段が上がる盆明けまで草勢を維持させることが課題でした。佐藤さんと清野さんは「Vシュート」は決して多収の品種ではありませんが、9月以降に問題となる褐斑病やべと病に強いことと、つるもちのよさで後半まで収穫できることが利点だったと話されていました。

↑左からＪＡふくしま未来保原営農センター営農指導係の清野拓也さん、ＪＡふくしま未来伊達地区営農経済課営農指導係兼営農指導員トレーナーの佐藤裕基さん。

↑選果機は２レーンあり光センサーを使って長さ、太さ、重さ、形状などでＡＬ～無印の６段階に規格分けされる。

↑氏家さんは「Vシュート」を主茎と強い小づるの２本仕立てで栽培。「去年より長く、９月まで収穫できそう」と手ごたえを語られた。

↑朝出荷された「Vシュート」。８月下旬でも比較的果形の乱れは少なかった。

生産者 氏家慎之介さんの評価

「Vシュート」を導入した生産者の氏家慎之介さんは現在23歳。18歳で就農し、母親と祖母の3人の家族経営で、パート2名を雇用し収穫・管理作業をされています。去年から「Vシュート」の少量試作を開始し、今年は露地30aのうち約3割の10aで導入されました。時期によって価格が変動する中で安定した収益化のため初期多収型の品種とスタミナ型の品種を組み合わせる計画をしていた中で、「Vシュート」が長期出荷できるつるもち性のよさが導入の決め手だったそうです。

今年の「Vシュート」について伺うと「草勢を見ていると初期の雌花の除去をもう少し抑えて摘葉することで初期の収量もあげられそうです」と来年の収量増を目指し、ゆくゆくは法人化も見据える意欲的な眼差しに力強さを感じました。

今後、「Vシュート」が夏秋キュウリ産地の一端を担う品種として産地の発展に貢献できることを期待しています。

「タキイ涼感ホワイト外部遮光」巻き上げ機併用で開閉可能！遮光率50％の効果はここ福島県伊達地区でも実感！

（編集部：2023年８月24日取材）

←
内側からの開閉の様子。

→
外側からの開閉の様子。

福島県伊達郡川俣町のハウスでミニトマト「サマー千果※」を栽培する遠藤金男さんのハウスでは以前から遮光率30％のネットを使用しています。その理由は①ミニトマトの軟果や焼け、裂果防止、②ハウス内温度抑制効果による作業性向上のためです。

しかし最近では東北地方でも夏場が高温となる日が多く、高遮光率のネットを検討されていました。ただし遮光率が高いものは曇天続きの梅雨時期や光量が減少する秋口以降は天井に掛けたままでは生育に影響が出ます。

そんな中、特殊ハトメ加工を施した「タキイ涼感ホワイト外部遮光」と巻き上げ機を使用することで天候に合わせた開閉が可能であったため、遠藤さんの希望に叶い本年導入されました。

取材日の外気温は13時で36℃を温度計が示す中、隣接する遮光率30％のハウス内が約40℃に対し、遮光率50％のハウスは37℃と、３℃違えば体感温度は全く違うことを実感できました。

納品業者の大内わら工品株式会社の大友彰部長は「やはり50％は効果が高いです。一人で巻き上げ機の設置をするというハードルはありますが、導入後は効果を実感できます」と記録的猛暑が連日続く当地でもその必要性を強く感じた取材でした。

※「サマー千果」の種子は地域限定販売です。